

自己の効果的・肯定的変化を促すインテリアデザイン理論の構築

Theory Development of Interior Design to Encourage Occupants
to Make Effective and Positive Changes

松田 奈緒子 (MATSUDA Naoko)

本研究は、住み手がそれぞれに適した空間の中で、心地よく過ごすことができるようにするために、空間の自己化を手掛かりとして、インテリア空間のデザインをサポートする理論の構築を目指す。

人は何もない空間に対し、そこに住み始めたときから、自分の生活や感性に相応しい個別の空間に仕立て上げていく。これを「空間の自己化」という。すなわち、インテリア空間に自己が投影される。しかしそれだけではなく、逆にそのインテリア空間に自己は影響されることもわかっている（松田・加藤 2014）。それならば、インテリア空間をある意思・意図をもってデザインすることにより、自己の効果的・肯定的変化を促すことが可能なはずである。

しかし、これまでの研究では、調査対象者が 10～20 代の一度きりを対象としていた。自己はコロコロと変わるものではなく核となる部分がある一方で、年齢を重ねれば、時代や環境に合わせて自己を変容させる必要もある。自己とインテリア空間の関係は、物心がついてから死ぬまで続くことを鑑みれば、時間の経過による関係性の変遷こそ着目し、解明するべきである。そこで本研究は、2001 年の調査対象者による空間の自己化と自己化された空間の影響が約 20 年を経た今、どの様に変わったかを捉えることを目的に調査を実施する計画である。

本年度は、自室のインテリア空間の自己化に関し、時代による影響を検証するため、写真投影法とプロトコル分析を用いて、建築・インテリア系の大学生を対象に、2001 年と 2019 年の比較を行った。さらに、2001 年の調査では不十分であった空間の自己化過程における調査対象者の類型化を行った。2001 年と 2019 年の調査対象者を合わせて、クラスター分析により「未重視型」「日常重視型」「方針重視型」「機能重視型」「思い出重視型」「日常・思い出・感覚重視型」の 6 つのタイプを導出し、その特徴をつまびらかにした。

その結果、インテリアに関する情報量も商品量も増えた 2019 年の方が、むしろ十分に空間の自己化を果たせていない者が多いという実態が浮かび上がった。この空間の自己化意識の異なる 6 タイプに対して、それぞれに適切に対応することにより、インテリア空間の自己化を促すことができると期待される。

なお、研究成果の一部は、「建築・インテリア系大学生の自室インテリア空間に対する自己化の時代比較」（日本インテリア学会論文報告集 31 号、pp.117-124、2021 年 3 月）にとりまとめている。